月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.151



祝！７周年!!　新キャラクターも登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット

辻斬り現る！　被害者は……〇〇!?
も～っと集まれ！ ファルコム学園

アドル＆カージャのスキル情報が到着！

『イースX -NORDICS-』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

2 目次

4 W主人公のスキルや冒険に役立つ情報が到着！
『イースX -NORDICS -』

10 も～っと集まれ！ ファルコム学園
新久保だいすけ

20 ファルコムニュース

22 7周年キャンペーン期間がスタート！
『英雄伝説 暁の軌跡』

26 リベール王国を名物記者コンビと巡る
英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット
著：はせがわみやび　イラスト：西野幸治

アドル&カージャの戦闘スキルの詳細が到着!



さらにフィールドやダンジョンに用意された特殊ギミックも明らかに!

イースX - ノーディクス -

- ◆発売日:2023年9月28日
- ◆ジャンル:アクションRPG
- ◆対応機種:Nintendo Switch、PlayStation5、PlayStation4
- ◆プレイ人数:1人
- ◆CEROレーティング:C
- ◆価格:[通常版] 7,800円(税抜)
  [《アドル・クリスティン》Edition] 11,000円(税抜)
  [ダウンロード版] 7,500円(税抜)

『イース』シリーズ生誕35周年記念作にして、ナンバリング最新作となる『イースX』。発売直前号となる今回は、アドルとカージャの固有スキルについての詳細が到着！　ほか、冒険の中で役に立つマナアクションや、システムについての情報も明らかとなった。新たな冒険の始まりに向け、しっかりと準備しておこう。

アドル & カージャの固有スキルをチェック!

さらに、2人で攻撃する強力なコンビスキルも!

固有スキル攻撃とは?

固有スキル攻撃はSP（スキルポイント）を消費することで発動することができる様々なスキル攻撃だ。ソロモード、コンビモードそれぞれにスキルが用意されており、ソロモードでは各キャラの、コンビモードでは2人のSPを消費する。

ソロモード・アドル専用スキル

【マナシュート】威力：55

マナの波動を剣先から射出して離れた敵を攻撃するスキル。威力、ブレイクダメージともに控えめなものの、消費SPが低いため、敵接近時の牽制攻撃としても活用させることが可能。



【レイドスラッシュ】威力：110

素早く移動しながら前方の敵を斬りつけるスキル攻撃。威力は控えめだが、技の出が速く通常攻撃からのコンビネーションとして繋げやすい。



【カーマインブラスト】威力：270

マナシュートの上位スキルにあたるアドル専用の大技。マナの力を振り絞り、超高密度の熱線を一定時間射出する。射出中は方向を変えることも可能で、ヒット時には敵に燃焼効果を与える。





【星方陣】威力：495

レイドスラッシュの上位スキルにあたるアドル専用の大技。アドルを中心に星の軌跡を描きつつ、触れた敵を駆逐していく。ソロモード用のスキルとしてかなりの威力を誇るほか、発動時中は無敵になるという特性を持つ。





ソロモード・カージャ専用スキル

【フリップアクス】威力：85

斧で力強く斬り上げるシンプルなスキル攻撃。威力は低めだが、敵を打ち上げることで相手を無防備な状態にすることが可能。



【シールドバッシュ】威力：145

円盾（ラウンドシールド）を構えつつ、前方に体当たりするスキル攻撃。発動中は制御が利かなくなる代わりに敵の攻撃をジャストガードで防御することが可能。



【ロストコキュートス】威力：285

フリップアクスの上位スキルにあたるカージャ専用の大技。凍てつくマナの力で周囲に氷獄を生み出し砕き散らす。発動中は氷獄付近の敵を引き寄せるほか、打ち上げ＋凍傷効果も併せ持つ。



【スクルドストライク】威力：530

シールドバッシュの上位スキルにあたる高威力の大技。・円盾と斧、蹴りを組み合わせたノーマン仕込みの豪快な連続攻撃をくり出す。発動中のジャストガード効果に加え、吹き飛ばし＋凍傷効果も併せ持つ。





POINT

同じスキルを使い続けることで"熟練度"が上昇するようになっており、熟練度がMAXまで上がるとそのスキルの威力がアップする。また一部のスキルでは、熟練度や特定の条件を満たすことで更に強力な威力や効果を持つ上位スキルを修得することもあるようだ。



探索がより楽しく便利に!

マナアクション《マナセンス》

古導具（アンティーク）《ドルイドモノクル》を入手することで、特殊アクションである《マナセンス》が発動できるようになる。マナセンスは、モノクルを通じて普段は見えないものが見えるようになるマナアクションで、周囲の敵の存在や様々なギミックを把握できるようになるほか、地中に埋もれたアイテムなども発見することができるようになる。さらに、《ドルイドモノクル》を強化することでマナセンスが研ぎ澄まされて一定時間、周囲の時間をスローにする効果が発動。通常では通り抜けられない扉や、落下してしまう足場なども突破できるようになるのだ。



アドル & カージャがそれぞれ単独で行動することができるようになる

「ワタリガラスの標石」

「ワタリガラスの標石」はダンジョンなどに設置されているオブジェクトで、これを調べる事で一時的にアドルとカージャを繋いでいる「マナの枷」を解除することができる。解除することで、標石の周辺エリアをアドル、カージャそれぞれで独立して操作することが可能となるのだ。ボタンでアドルとカージャを切り換えつつ、離れた位置にいる2人を連携させながら攻略していこう。



POINT

単独操作時はサポートが無いので要注意！

「マナの枷」を解除して単独行動をしているので、解除中は相棒のサポートを受けることができない。また、コンビモードに切り替えることもできないため、専用スキルなどが使えないのはもちろんのこと、コンビガードでしか防ぐことのできない敵のパワーアタック攻撃にも注意する必要があるのだ。

コンビモード専用スキル

【ダブルスマッシャー】威力：310

連なるように跳躍し、眼下の敵目掛けて苛烈に叩きつけるスキル攻撃。ブレイクダメージ値が非常に高く、ヒットさせることで多くの敵をダウンさせることが可能。



【アダマスセイバー】威力：170

マナの力で敵の攻撃を防ぎつつ、間髪入れずにカウンター攻撃を叩き込む攻防一体のスキル攻撃。コンビモード用のスキルとしては威力が低めなものの、発動中はアドル＆カージャが無敵状態となる。



【ブレイザルクロス】威力：380

アドルとカージャが交差するように駆け抜け、V字状の斬撃を放つスキル攻撃。一瞬で敵との距離を詰めることができるほか、ヒット時に相手を吹き飛ばすことが可能。



【ゼナストライカー】威力：325

マナの枷で繋がれた相棒を豪快に投げ飛ばして周囲の敵にダメージを与えるスキル攻撃。ヒット時に相手を吹き飛ばすほか、投げ飛ばす役割に応じて燃焼（アドル）、凍傷（カージャ）の効果も発生する。



POINT

コンビモードでの戦闘時に、敵の攻撃をガードして「リベンジゲージ」を溜めた状態で専用スキルを発動すると、ゲージに表示された倍率でスキルが強化される。また、スキルの熟練度を上げることで基本的な威力がアップするので、リベンジゲージ MAX& 熟練度 MAX でスキルを発動すると、ソロモード時のスキルをはるかに上回る大ダメージを与えることができる。



FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！ 新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『くるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円＋税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.



リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税） ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

★巷を騒がす物騒な辻斬り、あらわる!★





呪いの妖刀



拘束のプロ



ただの見物人



斬られる男たち



イケメンの認定ライン



クツジョク



ピッカードに魅入られし者



アニエスとLGC



群れの中の例外



試される妖刀



闇に忍ぶイケメン



封印の寿命



▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『イース』シリーズ×SuperGroupies初コラボレーションが実現！

コラボアイテム全9種予約受付中

主人公アドルと、彼が冒険中出会った歴代のヒロイン、ダーナとフィーナをラインナップ。作品の世界観とキャラクターらしさを充実に表現したスペシャルな全9アイテムです。

■予約期間：2023年8月23日（水）～9月11日（月）12:00
・腕時計／2024年2月上旬ごろお届け
・バッグ・財布／2024年1月上旬ごろお届け
■価格：腕時計／各22,000円（税込）
バッグ／各17,600円（税込）
財布／各15,400円（税込）

販売ページ
https://www.super-groupies.com/feature/ys_01_watch



「イースX -NORDICS-」体験会開催決定！

ビックカメラ新宿西口店にて、9月28日（木）発売『イースX -NORDICS-』体験会の開催が決定。『イースX』（PS5版）の体験プレイを最速でお楽しみいただけます。

2023年9月9日（土）11:00～17:00

■入場料：無料
※当日は試遊整理券を配布する場合がございます。
※整理券は数に限りがございます。

■会場
ビックカメラ新宿西口店 3階 テレビコーナー
〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-5-1 新宿西口ハルク

店舗HP
https://www.biccamera.com/bc/i/shop/shoplist/shop016.jsp



イース トロピカルバカンス推しくじ販売中！

イース35周年を記念して「イースVIII」「イースIX」のミニキャラ推しくじが登場。一度に10点購入で描きおこしポストカード（全12種）をランダムにて1種進呈します！

■販売期間：2023年8月23日（水）～9月24日（日）
■販売価格：1回770円（税込）
■配送手数料：全国一律660円（税込）【10個以上購入で無料】
※商品サイズにより変更の可能性がございます。
■商品発送予定日：2023年11月中旬頃より順次出荷予定

販売ページ
[イースVIII推しくじ] https://oshikuji.jp/item/?id=yst8
[イースIX推しくじ] https://oshikuji.jp/item/?id=yst9





『英雄伝説 閃の軌跡』10周年記念展開催決定！

「英雄伝説 閃の軌跡」の発売10周年を記念した、『閃の軌跡』10周年記念展を開催。閃の軌跡シリーズの展示・物販などが期間限定で実施されます。
各会場、期間中に「日本ファルコム」関連商品を3,000円（税込）ご購入・ご予約毎に、閃の軌跡特性ステッカーをランダムで1枚プレゼント！

■開催場所・期間
オノデン1F（秋葉原）：2023年9月23日（土）～10月9日（月・祝）
ジーストア名古屋：2023年10月21日（土）～10月29日（日）
ジーストア大阪：2023年11月3日（金・祝）～11月12日（日）
ジーストア小倉：2023年11月25日（土）～12月3日（日）
ジーストア仙台：2023年12月16日（土）～12月24日（日）
■入場料：無料
■主催：タブリエ・マーケティング株式会社
■協力：日本ファルコム

特設サイト
https://www.geestore.com/event/gallery/sen10th/



クロウ・アームブラストを中心に描く、オリジナルWEB4コマ公開中！

『英雄伝説 閃の軌跡』シリーズ生誕10周年を記念して、クロウ・アームブラストを中心に描かれるオリジナルWEB4コマ「クロウの《奔走（とっとこれーるず）》！》」を公開中。物語の裏側で動いていたクロウの日々をお楽しみください。



■作：木々ゆうき
■原作・監修：日本ファルコム
■企画：電撃オンライン

まとめページ
https://dengekionline.com/feature/crow_trails/index.html

完全受注限定生産品「黎の軌跡」アニエスの抱き枕カバー予約受付開始！

株式会社フジボウルより、「英雄伝説 黎の軌跡」『アニエス・クローデル』の抱き枕カバーが発売決定。表に『私服』、裏に『水着』のイラストがプリントされ抱き枕カバー限定の描きおろしイラスト線画を公開中です。



■予約期間：2023年9月19日（火）まで
※期間後の販売はございませんので、期間内にご予約ください。
■発売日：2023年11月予定
■販売価格：13,800円（税・送料込み）
■発送地域：日本国内限定
■サイズ：W500mm×H1600mm
■発売：株式会社フジボウル

販売ページ
https://dakimakura.shop/details.php?title=30

8月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



スカーレットナイツ・フィー

《西風の妖精》が今回新たに身にまとうのは、赤き騎士姿。騎士とはいえ、その俊敏さを存分に活かすことができる軽装姿なのはフィーらしいところ。短剣ではなく剣を両手に携えているのも彼女らしさか。

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。祝！ サービス開始７周年！ ということで８月末から７周年を記念したイベントやキャンペーンが開催中！ さらに、新キャラクターも参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

『暁の軌跡』極秘資料館

「スカーレットナイツ・フィー」衣装デザインラフ
（2023年8月実装）



「リアンヌ・サンドロット」衣装デザインラフ
（2023年8月実装）





リアンヌ・サンドロット

『閃の軌跡Ⅳ』より、《槍の聖女》ことリアンヌ・サンドロットが参戦！ エレボニア帝国中興の祖・ドライケルス大帝とともに《獅子戦役》を駆け抜けた大英雄だけに、本作でも活躍してくれること間違いなしだ。

期間限定イベントシナリオ「ナハトの奮闘記 Vol.26 ジョゼット編」が実装！

荷物の配達を依頼すべく、カプア特急便を訪れたナハト。
事務所からはジョゼットの怒声が飛び、険悪なムードが漂っていた。
ジョゼットの怒りの理由と不器用な兄たちの思いとは……。

７周年を記念したイベント＆キャンペーンが好評開催中！

正式サービス開始から７周年を迎えたことを受け、記念のログインボーナスや、無料１０連ガチャなど、様々なイベント＆キャンペーンが開催中だ。
詳しくは公式ホームページやお知らせをチェック！

※無料10連ガチャは９月６日の定期メンテナンス前、ログインボーナスは９月21日の定期メンテナンス前まで開催。









※このイベントは終了しています。

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TVアニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け!
愛と希望の流れ星!
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中!
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円(税別)／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら➜www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら➜www.field-y.co.jp/falcombooks

「ちっ。なんだってんだ……」
　怒りを押し殺しつつも、他に何かできることがあるわけでなく、ナイアル先輩はリラさんの後を追って大股で歩き出した。ドロシーも慌てて続く。
　——待っていた？　……わたしたちがくるのを？
　考えても判らなかった。
　仕方なく、ドロシーも疑問を取りあえず棚にあげて扉をくぐる。

入った先は吹き抜けの大きな広間になっていた。正面に濃い色のお仕着せを着込んだ男が立っていた。ドロシーたちを目にすると、深々と腰を折る。
「ようこそ、ナイアル様、ドロシー様。執事のメントスと申します。以後、お見知りおきを」
「ナイアルだ」
「ド、ドロシーです」
「お嬢様……市長は、二階の奥の間でお待ちでございます」
「あ。は、はい」
あれれ、と思ったのはあっという間にリラさんの姿が見えなくなっていたからだ。
とまどってしまうけれど、二階、というのはすぐにわかった。
左手に階段が見えている。あれを昇るのだろう。
赤い絨毯が敷かれた階段を昇る。吹き抜けに向かって張り出した形の回廊へと辿りつくと、ぐるっと回った先に扉が二枚見えた。
奥の部屋と言っていたから、たぶん遠くに見えるほうの扉に違いない。
——勝手に歩いていってしまってよいのでしょうか。
「おい。行くぞ」
「あああ。待ってくださいよう」
一瞬の躊躇もなく進む先輩記者は度胸があるのだか無鉄砲なのだか。

それにしても……広い屋敷だった。
さすがは商業都市で最も大きな商業施設を所有する市長の家というところ。張り出し廊下の幅だけでも、人が五人は横に並べそう。
緑の好きな主らしく、屋敷の中だというのに、あちこちに鉢植えの観葉植物が飾ってあるのが見てとれた。
「ミラかけてやがるな……」
「ですねぇ〜」
奥の扉まで辿りつく。
「邪魔するぜ!」
ノックもせずに押し開けた。
「せせ、せんぱい!」
「こんばんは、ナイアルさん、ドロシーさん」
部屋の主がにっこりと笑みを浮かべた。
ノックも無しに入ってきたのにそう言ってくるのだから、足音だけで誰が来たか判ったということなのだろう。
開けた扉の向こうには、平服ではなく、昼間見た通りの余所行きの外着をぴしりと着込んだメイベル市長が、椅子に座って待っていた。

欠片も驚いていない。
「不意打ちもできず、かよ……」
ナイアル先輩がつぶやく。
――って、ノックなしはワザとですか！　度胸ありすぎですよぅ、先輩！
仮にも市長である。名士なのだ。
「はぁん。そういうことかよ……」
無謀先輩がつぶやく。
「……何がそーいうことなんですか？」
「市長は、どうやらおまえの撮った写真に用があったらしいってことだよ」
――はい？
「なんで、そんなことが判るんです――かって、ああ！　それわたしの！」
ようやく気づいた。
座っている市長の前。大きなテーブルの上に散らばっているのは、あれは自分の撮った写真じゃないか。まさか、もう記憶子である感光クオーツを取り出して焼き付けまで済ませてしまったということだろうか。
メイベル市長が椅子から立ち上がってにっこりと微笑んだ。
「そうです、あなたの写真ですよ、ドロシーさん」

対面に用意されていた椅子に座るようにと促しながら、若き市長は「見事な写真ばかりです」と誉めてくる。
自分としては不本意な出来だったのだけれど、メイベル市長は満面の笑みだ。
――どういうことでしょう？
「話してくれるんだろうな？」
無鉄砲先輩の遠慮ない物言いに、メイベル市長が言う。
「もちろんです。ただ、あまり時間がありませんので、手短に」
時間……？　と、ナイアル先輩は市長の言葉を聞き咎めたものの、話を聞く事を優先させたようだ。
「南街区の強盗事件をご存じですか？」
前置き抜きで市長に言われて、言葉の意味が頭に染み込むまで少しかかった。
「……強盗事件？」
「知ってるぜ」
ナイアル先輩は椅子に座りつつ頷いた。
そういえば、と、ドロシーも思い出した。これでもいちおう新聞社のカメラマンである。ボース市の南側の地区で起きた事件だ。
確かまだ解決していないはず……。

「ボースは商業都市ですから大陸の富が集まってくるわけです。故に――それを狙われることも多く……。南街区の事件は遊撃士協会のほうにも調査をお願いしているのですけれど、その事件も収まらないうちに――」

「何か新しく問題が起きたってのか？」

「はい」

柔らかな笑みを浮かべていたメイベル市長の顔がすっと引き締まる。

「今度は、ボースマーケットが狙われているのです」

えっ、と驚いた。

マーケットが。

狙われている？

「……誰に？」

ナイアル先輩の声も厳しくなった。緊張している。

「盗賊団です」

「盗賊……」

「しかも、ただの盗賊団ではありません。魔法盗賊団です」

は？

魔法？

盗賊団？

「えええええええ!?」

9

「その計画があることを、メイベル様は早くから突き止めていらっしゃいました」

いつの間にか姿を現したリラさんがテーブルの上に香茶を並べながら言った。香茶というのは香草を用いたお茶だ。金色の液体は口に含むと鼻に抜けるちょっとすっきりする香りをもっていた。

「美味しい」

「ボースではマーケットでも売っている紅いお茶……紅茶が有名ですけれど、こちらもお奨めです。眠気覚ましのために、少量のミントを混ぜてあります」

「あ、だから、すっきり味なんですね！」

「なごんでんじゃねえよ！」

「いたた。だから先輩、なんで女の子の頭をポンポン叩くんですかぁ！」

「おまえに緊張感がねえからだろうが！」

むすっとした顔のまま横暴先輩が言った。

メイベル市長がそれを見てくすりと笑みを浮かべる。うう、美人さんの前で恥ずかしいじゃないですかあ。
「で、だ。話を戻すぞ」
そう促されて、メイベル市長が話し始めた。
「これを見てください」
彼女がまず指で示したのが、テーブルの上の一枚の写真だ。
ドロシーもしっかり覚えている一枚。市長を撮ろうとしたら、前にひとり邪魔な人影が写ってしまったヤツ。
あのときは、そう――ドロシーはよく覚えている。
シャッターチャンスだと思った瞬間に、市長は顔を背けてしまったのだった。
「職業柄、人の視線には敏感なものですから」
さらっと市長が言った。
そう言われて、さすがに気づいた。
「わたしたちが見ているの……判っていたんですか！」
にこっと微笑まれてしまう。
――と、どういうことになるのでしょう、それって。
「ってことは俺の取材を断ったのもわざとか」

「はい。ただ、もちろん当てにはしていませんでした。ドロシーさんのような名カメラマンがいると存じあげませんでしたし。ナイアルさんが引き下がらない性格だろうことは把握できたのですが。どちらかと言えば陽動に付き合っていただきたく……」
「陽動。ちくしょう。そういうことかよ……」
「あのー」
ドロシーはお代わりした香茶をずずっとすすってから尋ねる。
「よく……判らないんですけど」
そう尋ねると、だからな、と、苦労人先輩がため息をつきつつ解説してくれた。さらにメイベル市長が補足を入れてくれる……。
つまり――。
ボースマーケットを狙う盗賊団はひと月前からマーケットにたびたび潜入しにきていた、らしい。下見というわけだ。そのことに気付いたメイベル市長は、不審な客たちを逆に密かに観察していた。
ただ、あからさまに見つめては気づかれてしまうわけで。
「店を視察に来てる市長が、特定の客ばかり見つめていたらばれちまうだろ？」
「でも、そろそろ彼らが計画――つまり、強盗を実行しようとしていることは、何となく感じ取れていたんです。だから、少しでも彼らについての情報が欲しくて……」

「俺たちの尾行を利用したわけか」
「はい。おふたりのように、あれだけ目立って騒々しく後をつけてきてくださいますと、わたしとしても振り返ったり、キョロキョロしたりしても不自然ではなくなるわけなんです……あ、ごめんなさい」
尾行下手と言われた先輩が、ぶすっと今までで一番のふくれっつらになった。
しかし――ってことは……。
メイベル市長の言葉を信じるならば、ドロシーたちの尾行は市長に気づかれていただけでなく、あのマーケットにいた人たちの多くに気づかれてたってことに……。
カメラ越しの人物の視線がどこを向いているかは気にしても、ドロシーは自分が見られているかどうかなんて気にしたことがなかったのだ。
なんだか、ものすごく恥ずかしい、ような。
「うひゃあ!」
「いきなりわめくな!」
「あいたたた!」
また、はたかれた。
これはひょっとして職場内暴力なんではないでしょうか。ううう。
「それで、カメラマンの方が同行していることは、こちらのリラからも報告を受けておりましたので――」

突然叫び声をあげたわたしにも動じずに市長さんは言った。
「様子の不審な人たちをなるべく、ドロシー様とわたしとの間に置くようにしていたのです。ドロシー様には余計な人を写したくない思惑はあったと思いますけれど……」
あ、とドロシーはそう言われてようやく気付いた。
そういうことか。ドロシーとしてはメイベル市長だけを写した写真がベストだったけれど、市長の思惑はそうではなかった。余計な周りの人物まで写して欲しかったわけだ。
ドロシーとしても何も写さずに帰るわけにはいかなかったから、ベストは無理でもベターであればシャッターを押してきたけれど、それはまんまと市長の思惑に嵌ったということか。ぜんぜん気づかずに乗せられてしまった。
隠し撮り、というあまり経験のない状況でなければ、ひょっとして気づいていたかもしれない……。
そうか……そういうことだったのか……。
「うまくいけば、不審な人たちが写真の片隅にでも写ればよいな、と。まあ、かすかな期待以上のものではなかったのですけれど……」
メイベル市長が言った。
それは当然だろう。写真というのはピントを合わせるのが大変なわけで、つまり、市長を写

そうとしているかぎり、たまたま写りこんだ周囲の人間がはっきり映るはずがない。ボケた絵にしかならないはずなのだ。
ところが予想以上の成果があった。
そう言ってメイベル市長が示した写真は、ドロシーが市長の背後に胡乱な人物を見つけたときの写真だった。なぜか店のバッグヤードのほうばかり覗いているように見えた男。
ドロシーが思わず可愛くない、とつぶやいた、あの男。
ピントがしっかり合っていた。
ひげ面の顔がはっきりと映っている。
「この人物は、王国の指名手配書に載っている男です。ヴォルグ、と名乗っているこの男こそ、盗賊団《風の狼》の首領なのです」
「風の、狼……。神出鬼没で、今まで一度だって押し入って捕まったことがないって噂の、あの……魔法（アーツ）を使いこなすと噂の盗賊団か……」
ナイアル先輩の声が掠れた。
ひとつ大きく息を吐いてからメイベル市長が立ち上がった。
「あなたたちを利用させていただいたことは謝ります。ごめんなさい。でも、おかげでギリギリ間に合ったようです」
深々と頭を下げる。

ナイアル先輩が市長の言葉の端に引っかかった。
「ぎりぎり？」
「はい」
そのときドロシーは不意に思い出した。
先ほどメイベル市長は言ったのだ。
あまり時間はない、と。あれは——あの言葉の意味は……。
「彼らの計画の実行はおそらく今夜」
メイベルの凛とした声に、心臓が思わずどきんと跳ねる。
こん……や……。
「何故わかる？」
「《風の狼》について唯一知られている事があります。彼らの犯行はすべて月のない夜に行われているということです」
「月のない夜……」
ナイアルの押し殺した声。
あ、とドロシーも口を丸く開ける。
そうだった。今日は夜に入ると、すぐに街燈に灯が点っていたっけ。あれは何故かっていうと、今夜が月のない日だったからだ。

星明かりだけの暗い夜。
「ボースマーケットが襲われるのは今夜です」
商業都市の敏腕市長が確信を込めて言い切った。

10

西ボース街道へと続く街の門から、歩数にすれば二百歩ほど。一セルジュはたっぷりと離れた森の中から街の様子を窺う男たちがいた。
闇の中に、六人。
いずれも人相の悪い髭面の男ばかりだ。
着ているものは皮の鎧。腰には短剣。
その中のひとり、もっとも目つきの鋭い男。
ヴォルグ、と仲間内では名乗っている。
にぃと唇を歪めて笑みを浮かべてから口を開いた。
「野郎ども、いいか?」
残りの五人は黙って聞いている。
「ボースは宝の街だ」

こくっと、一斉に五人が頷く。
「あそこにゃあ、古今東西の逸品が――」
「?」
五人が首を傾げた。
「あー。……大陸あちこちの古い宝から新しい宝までが――」
「おお!」
「――揃っている。しかも、ひとつの建物の中にだ」
「おおおお!」
「《風の狼》としてもだ。この『おしごと』に成功すりゃあ名も上がるってもんだ。近頃じゃあ、空賊なんてぇのも出てきているようだが……。なあに俺たちの敵じゃねえ! 野郎ども、しくじるんじゃねえぞ!」
ひときわ大きな歓声があがった。
そうして男たちは動き始めた。
外灯が立つ街道を避け、灯りの届かない陰から陰へ。
男たちの行動はあらかじめ全て打ち合わせてあったようで、互いにひとことの言葉も発しない。やりとりは指を使った信号と交わしあう視線だけ。
門を避け、警備の目の届かない壁を乗り越えると、夜の闇にまぎれてボース市の中へと忍び

込んだ。
彼らの潜入に気づいたのは空の星たちだけだった。

11

ボースマーケット内。
日用雑貨の並ぶ金物屋の屋台の陰にナイアルは腰を屈めて潜んでいる。
そろそろ真夜中だ。
中の照明は落ちていて、あたりは闇が支配していた。
天窓から差し込む星明かりだけが頼りの暗がりで、ナイアルは己の心臓の鳴る音を聞いていた。
——本当に、今夜なのか？
マーケットへの襲撃を市長は月のない今夜だと予想していたが、果たして——？
そっと目だけを出してあたりを伺う。
あちこちにメイベル市長を筆頭に自警団の連中も隠れているはずなのだが、ナイアルには感じ取れない。
段々不安になってくる。

ひょっとして、市長にまた一杯食わされたんじゃなかろうな？　そんな想いまで沸き上がってくる。
利用されたことを許す代わりに、ナイアルは、市長の計画した大捕り物の取材を申し込んだ。ぶっちゃけて言えば、盗賊団の襲撃とその逮捕の場面に立ち会わせろとねじ込んだわけだ。
危険だからと断ろうとした市長だが、そこはナイアルも粘った。ここで引いては事件記者は名乗れない。事件を取材できない事件記者なんて魔獣を退治しない遊撃士と同じだ。存在価値がなくなっちまう。少なくとも、ナイアルはそう思っていた。
店内に籠もっていた昼の熱気が徐々に冷めてきた。もうすぐ真夜中なのだから当たり前かもしれない。酒も抜けてしまったようで、少し肌寒く感じる。こうなると、呑んでばかりで、ちゃんと食べてこなかったのが悔やまれる。
「腹減ったな……」
聞こえるか聞こえないかのかすかな声でつぶやいたつもりだったが、返事があった。
「ほーふぇふか？」
くぐもった声だ。
ナイアルは屋台の裏で振り返った。
彼の背後にいるひとりの少女が腰をぺたんと床につけて口をもぐもぐさせていた。
「なに、食ってやがる！」

言わずと知れたドロシーだった。
「はふでふ」
「ああん？」
これです、と言いたかったらしい。
ドロシーが手に持ったそれを見せてくる。窓からの星明かりだけではよく見えないが、スポンジ状の食べ物だ。
ごっくんと呑みこんでから、
「張り込みにはパンですよう」
と言いやがった。
「パンじゃねえだろ……おい」
「だから、パンが無ければお菓子にすればいいのです。似たようなものですし……って、リラさんが言ってました。あ、これはリラさんからの差し入れで――」
「聞いてねえよ」
――大声でつっこみてぇ！
待ち伏せ中でなければ遠慮なくわめいていたところ。
いつの間にかドロシーは、ふわふわタマゴのカステラこと『スイートカステラ』をリスのように口の中に詰め込んでいた。呑み込みきれない分で頬が膨れている。リスの餌袋か、おまいの頬は！　と左右から引っ張ってやりたくなった。
天才は判らねえ。
さっきまで少々落ち込んでいたと思っていたのだが、今は平気な顔をしていやがる。
景色の表情が見えない、とか悩んでいたようだが。
まあ、あれだな――。
「ムカデの二人三脚ってやつか……」
ぽつり、漏らした言葉をドロシーが聞き咎めてきた。
「なんですか、それ？」
ドロシーが顔をしかめた。虫が苦手なんだろうか。
「ムカデっているだろ？　脚が百本あるっていう」
「そ、それが？」
「昔話だよ。ムカデが人間と二人三脚をすることになった。人間に『足を出してくれ』って言われて、どの脚を差し出すべきか悩むんだ」
「……百本ありますもんねぇ」
「で、転ぶ」
「ああ――それはまあ。え……それがどうかしたんですか、先輩」
「いや、なんでもない」

百本の脚を自在に操るムカデが、たった一本の足を出してくれと言われただけで混乱する。
普段あたりまえにやっていることだからこそ、わずかなきっかけで壊れる。
天才ゆえの、ちょっとしたスランプってやつだったのかもしれねえな。
ナイアルは改めてドロシーを見た。
彼女の首からは細い紐が提げられていて、その先にはオーバルカメラが繋がっている。
愛用のカメラを返してもらったからか、それとも自分のカメラ技術のせいでベスト写真が撮れなかったわけではないと知らされたからか。
すっかり元のドロシーに見える。
危ないからホテルで待っていろ、とのナイアルの言葉も、『カメラがあるのにカメラマンがいないなんてあり得ません』などと言って引かなかった。
「はい、センパイ！」
「……なんだ」
「おすそ分けです。まだ、ひとかけら残ってます～」
手のひらの上のカステラの欠片。
ほんとにひとかけらだった。
「い、いらねえっての！」
「またまたぁ。先輩、お腹鳴ってましたよ？」
「鳴ってねえ！」
思わず声を荒げてしまい、しぃ、っとたしなめる声が耳を打った。
視線を上げると、メイベル市長が腰に手を当てて睨んでいた。
「お静かに願いますね？」
「お、おう」
わりぃ、とナイアルは口ごもる。
――やべぇ。俺としたことが。
これでもし張り込みが失敗したりしたら、取材拒否どころの問題じゃねえぞ。
「あはは。怒られてしまいました。失敗失敗。反省ですねー」
「笑いごとじゃねえ……てか、ほんとに反省してるのか……？」
なんつー、能天気娘だ、こいつは。
判っていたが、改めてナイアルはドロシーを見て思った。大物だ、こいつは。
ため息をついた、そのときだ。
西の出入り口のほうからかすかな音が聞こえた。

12

六つの影がマーケットに辿りついた。
盗賊団は、ボースマーケットに西側から近寄り、閉ざされた入り口の扉へと辿りついた。
《風の狼》の一団だ。
それは導力で開く分厚い扉だったが、男たちのひとりが腰のポーチから取り出した携帯型のオーバルトーチで扉の一部を丸く焼ききった。鍵の部分を壊され、重い扉はきしむような音を立ててこじ開けられる。
頭領のヴォルグが全員の顔を見回してから親指を立てる。
手下たちが頷いた。
親指を下へと打ち下ろすと、それが合図だったようだ。
彼らは全員が遊撃士が持つような導力器を腰の革帯に備え付けていた。その戦術オーブメントにセットされた結晶回路を指でなぞりあげたのだ。
導力器は個人ごとに調律されるし、クオーツの構成も個人ごとに異なる。従って駆動できるアーツもそれぞれ異なるはずだった。けれども、彼らは互いの使える導力魔法をよく把握していて、唱えられない魔法は互いに融通してかけあう手筈になっていた。
クロックアップ改。
そう名付けられている導力魔法が最初に発動した。
盗賊たちの頭上に次々と光の円陣――魔法陣が現れ、円に重なるように時を刻む幻影の針が現れた。巨大な針が頭上でぐるぐると回り始める。
白い羽が飛び散り、翼の鳴る音が響いた。
鮮やかなアーツの光が闇を散らして男たちに降り注ぐ。
時、の属性を持つクオーツによって導かれる魔法の力が現実を捻じ曲げた。
盗賊たちの手足の、身体の動きが風のように素早くなり、目で追うのが困難なほどになった。
時の流れが加速したのだ。
六人は疾風のようにボースマーケットへと躍り込む。
《風の狼》。
ヴォルグの率いる盗賊団がそう呼ばれる所以がここにあった。
初めに彼らに気づいたのは、潜んでいた自警団の人間ではなく、丁度出入り口近くを定時巡回で訪れた衛視だった。
アーツの光を封じ込めた角灯――オーバルランタンを手にして見回りをしていた衛視が、空気の流れを感じた。暗闇の中、気配を頼りに角灯を振る。
ぼうっと人影が浮かび上がった。

「ど、どろぼ――」
声をあげようとする衛視に向かって、盗賊のひとりが腰の結晶回路を素早くなぞりあげ、指先を突きつける。意志の力と身体の動きを通して、導力の向かう先を固定させたのだ。
アーツが発動し、衛視の男へと降りかかる。
闇を切り裂いて白い光の束が男の足下から頭上へと向けて迸った。顎先から照らされた逆光の中で彼の表情が恐怖に凍りつく。
「ひっ――う、うわ――」
アーツに包まれた衛視の身体が白い光の中でゆらゆらと揺れて見えるのは、時間の揺らぎが発生したためだ。細かく乱された時の流れに身体が巻き込まれ、吐き気と目眩が耐え難いほどにまで増加してゆく。
白く濁った空気の中、ちかちかと明滅するような幻が目の前に浮かびあがり、意識が遠く遠くかすれてゆく。
「う、うぁ――」
衛視の悲鳴が中途で切れた。
時の流れを乱していた白い光が消えるとともに、どさり、と身体が床に崩れ落ちる。
白き滅びの地（ホワイトゲヘナ）へと誘（いざな）われた衛視の意識は、これで半時は戻ってこないだろう。
闇の中で、盗賊たちが声もなく笑った。

そうして彼らはマーケット中央の噴水広場まで辿りつく。
ヴォルグが、中に押し入ってから初めて言葉を発した。
「いいか、野郎ども！」
その声がやや甲高く響く。加速した時の流れの中にいるからだ。だが、全員が同じように加速しているので、仲間たちの間ではいつも通りに聞こえるのだった。
「食い物とか、たいして儲からねえ物は放っておけ。ここは、なんでもありすぎるほどあるからな。なるべく金目のものだ。洗いざらい頂くぞ！」
おおう、と応えが返る。
と、同時だった。
天井の明かりが一斉に点り、凛とした声が響いた。
「そこまでです！」
明かりの下に立つのは、ボースの若き市長メイベル。
彼女の背後には自警団の一隊が控えている。それだけではない。噴水を取り巻くようにして、陰から鎧を着込んだ男たちが姿を現した。
「お、お頭、後ろにも！」
「待ち伏せてやがったか……」
眼光を光らせるヴォルグのまなざしを真っ向から受け止めて市長が宣言した。

「《風の狼》ですね？　抵抗を止めて、おとなしく捕まりなさい！」
「へっ……。聞けねえな。野郎ども、判ってるな！」
頭領の言葉を合図に、盗賊たちはいっせいに剣を構え、空いた手で導力器の結晶回路をなぞりあげた。
マーケットを舞台にした戦いが始まった。

13

戦いの始まるほんの少し前まで。
実のところ、ナイアルが思ったほどにはドロシーは立ち直ってはいなかった。
戻ってきた愛用のオーバルカメラ・ポチ君を手にしても、心の中に立ち込めた霧は決して綺麗に晴れたわけではない。むしろ今まで通り写真が撮れるかな、とちょっと怖くなっていた。
ただ、そんなことを言っていても好転するわけではないとも思う。
ならば――今できることをやるだけだ。つまり、カメラを構えて準備すること。
――わたしにできるのはこれだけですしねー。
それに、とドロシーは思う。カメラマンとして、この機会は美味しすぎる。
とりわけメイベル市長の姿は絵になる。マーケットに明かりが点ると同時に、《風の狼》たちの前に堂々と姿を見せた。外見はたおやかな少女なのに、盗賊たちを前にして一歩も引きはしなかった。
なんて恰好いいんだろう。彼女の姿を見て、素直にドロシーはそう感じる。いや、自分でなくとも誰でも同じように感じるはずだ。
指が、勝手に動いていた。
カメラをいつの間にか目の前に掲げ、無意識のうちにシャッターを切っていた。
凛とした空気を纏って立つ女市長の勇ましい姿が、オーバルカメラの記憶子である感光クオーツへと次々と記録されていく。
「抵抗を止めて、おとなしく捕まりなさい！」
市長のその宣告を、盗賊たちは無視した。そうして盗賊たちと自警団は、互いに武器を抜きあい、導力魔法を使うべく空いている指を動かし――。
――っと、そうか。市長ばかり撮ってちゃだめだ！
この大捕り物の全体も記録しないと。
ドロシーは慌てなかった。手先だけでカメラを動かしても、被写体をうまく追うことはできない。自分とカメラがひとつの生き物になっているかのように、シャッターチャンスを求めてドロシーとカメラはフロアを動いた。
メイベル市長が相対している相手――。

レンズを振り向けた先の六人の男たちは、魔法を使う盗賊団である。それを市長は知っている。
ボースマーケットを狙った彼らの正体が《風の狼》であることを事前に突き止めていたからだ。それにはドロシーの撮った写真も一役買ったわけだけど。
それはともかく――。
メイベル市長は待ち伏せ要員の中に導力器を扱える者を待機させていた。
そして、盗賊団が抵抗すると見てとると、即座に「アンチセプトオールを！」と命令を下した。
アンチセプトオールは封魔――魔法を封じる効果を持つアーツだ。真っ先に相手の魔法を封じようとしたわけだ。迷いなく素早く。
命じられた男が、胸元にペンダントのように提げていた導力器に指先を触れる。
スロット、と呼ばれる穴に埋め込まれたクオーツを、固有の連結構造に従って指で紋様を描くかのようになぞってゆく。
意志を込めて導力器を駆動させれば、彼の指先には出口を求めて神秘の力――導力が集まってくる。
ドロシーもオーバルカメラを駆動させるときに同じ経験をしているから判る。
ああすると、じん、と指先が火傷をしたかのようにかすかなしびれを感じるのだ。
導力を導き終わった男が魔法を飛ばすために叫ぶ。

「やっ！」
声とともに六人の男たちに向かってぴりぴりする指を突き出した！
次の瞬間。
盗賊団の男たちの頭上にひっくり返った巨大な赤い渦巻が忽然と出現した。
マーケットの天井から吊り下がったシャンデリアや展示用のオブジェと重なるようにその竜巻はぐるぐると渦を巻き、ゆらゆらと揺らしてみせる。
けれど――ドロシーは知っている。
あの赤い渦は実際には吊り下がった物のひとつたりとも揺らしてはいない。あれは実体のない導力の渦だ。漏れだしたわずかな力が空気と反応して光り出して可視化されているだけ。
逆立ちした赤い竜巻が渦を太らせながら頭上から落ちてきて、六人の男たちを傘で覆うように呑み込んでゆく。
うああ、と盗賊たちの声があがり――。
ふっ、と。
ほどけるように渦が消えた。ふらり。荒くれ者の何人かがよろける。お頭と周りから呼ばれていたひときわ大柄な男が、
「くそっ、これでも――」
喰らえ、と叫ぼうとした。だが、腰の導力器をなぞりあげて突き出した指先からは、如何な

る力も出てきはしなかった。

封魔――魔法を使えない状態にされているからだ。

時を司るクオーツが導くアンチセプトの魔法は、導力を駆動させるために必要な身体の中の属性バランスを壊し、そのバランスが自然に戻るまでアーツを使えなくする。

魔法盗賊団から魔法が奪われた、わけだ。

ドロシーのカメラフレームの中で、盗賊団の頭領の顔が悔しそうに歪む。唇を噛み、目をぎらつかせ、それでも彼は諦めない。右手に持った短剣を前に出し、二、三度振って、近づこうとする自警団の男たちを威嚇した。

《風の狼》の六人は、互いに死角を作らないようにしながら、塊となって自警団の輪を突破しようと計った。

彼らは焦っていた。

ファインダー越しにも見て取れた。

そうして、やたらと短剣を振り回しながら……六人のうちのひとりがこちらに向かって走ってくる。

大粒の汗を額に浮かべた男の顔がフレームいっぱいまで広が――え？　あ！

――やばっ。

――こっちに来ますよぅ！

当然だった。ドロシーの目の前には警備員がいない。だからこそ遮る物なくカメラで彼らを狙うことができたのだ。いつの間にか無意識にこの位置まで動いていた。盗賊たちからしてみれば、手薄なところに見えるわけで。そこを狙って突破を計るのは当たり前で……。

先頭を切って囲みを抜けようとした男が、カメラから手を離したドロシーと視線を合わせた。大きく目を見開く。

「あっ！　てめぇはマーケットで市長の後をだらだら追っかけてたカメラ野郎！」

「や、野郎じゃないですよっ。女です、女！　いちおう！」

思わず反論してしまい。しかも、一応ってなんですかー、と自分で自分に突っ込みたくなり――そんなことをしてる場合じゃないと気づく。

……でも、そこまで目立ってたのかやっぱり。まさか盗賊団の人たちまで、自分たちに気づいてるとは思わなかったですよ！　尾行になんて、なってなかったんですね！

――って、だから、こっちに来ないでくださぁぁぁい！

「おまえのせいかあああ！」

いえ、それは逆恨みですぅ〜〜〜〜〜〜〜！

叫ぶ間もなくあっという間に距離を詰められる。短剣をドロシーに向かって突きだしながら、どんどん近づいてきた！　そのときになって、男の声がやや甲高くなっていることにようやく気付いた。

クロックアップの魔法だ！
アンチセプトはこれからかける魔法を封じるだけで、すでに効果を発揮している魔法は防げない。甲高い声はクロックアップの魔法のせい。しまった。

　これは逃げられない。

　殺される！

　そう思ってから、そのあとの鼓動ひとつかふたつほどの間。魔法も使ってないのに、ドロシーには時間の流れがやけにゆっくり感じられた。口の中がからから。声も出せない。心臓の音がうるさいくらいに聞き取れた。手足が動かせない。まるで凍りついてしまったみたい。

　だ・れ・か――。

「てめぇえ――ぐ！」

　男がどさりと崩れ落ちた。

　長い木の棒――物干し竿だ――雑貨店の店先にあったやつ、を振り下ろしたままの恰好で荒い息をつきながら、見知った男が立っている。

「だ、だいじょうぶかよ」

「せんぱい……」

　ナイアルだった。

「すごいですよー、ナイアル先輩！　まるでエステルさんみたいです！」

「ばかやろう。本物の棒術使いに怒られ……っぞ。はあぁぁ。ったくもう」

　助かった。

　安堵したのも束の間だった。ナイアル先輩の背後から、別の盗賊が襲い掛かろうとしている。先輩は気づいていない。

　ドロシーの指がオーバルカメラのコンソールをなぞりあげ、無意識のうちに夜間撮影用の閃光を焚いていた。悲鳴をあげ、襲い掛かってきた盗賊が目を押さえてのけぞる。

　そこに自警団員たちが次々とのしかかって取り押さえた。

「あっぶねぇ……。ありがとうよ」

「わぁ」

　思わず声が出た。

「なんだそりゃ」

「ナイアル先輩からお礼を言われたのって初めて――」

「なわけねえだろ！　俺、そんなに恩知らずかよ！」

「――の気がちょっとだけしましたが、そういえば、前にもあった気がしますねー。たぶん、一年くらい前ですけど」

「あのなあ」

「冗談です、はい」

その頃には頭領のヴォルグを含め、《風の狼》六人全てが捕えられていた。

14

「やれやれ……」
肩で息をしながらナイアルはドロシーを見た。
相棒のカメラ・ポチ君を抱えて満面の笑みだった。きっと満足できる写真が撮れたのだろう。これでようやく本当に天才カメラマン復活だろうか。だと良いのだが。
「ナイアルさん」
声に振り返ると、メイベル市長だった。
「どうですか。良い記事は書けそうですか？」
美人市長に微笑まれる。
「あ、ああ。おかげさまでな」
「それは良かったです。あの、それで、ひとつお願いがあるのですが……」
市長の表情が微笑みから一転してごめんなさいの顔になる。
警報が体内で鳴った。
やっべぇぞ。あまりに簡単に同行取材の許可が下りたと思ったが……。確かにナイアルは粘り腰で交渉したけれど、それにしても敏腕市長にしては楽すぎたと思っていた。
「南街区の空賊騒ぎなのですが……」
「ああ、そっちはまだ解決してねえんだっけか」
「それが収まるまで、この事件を記事にするのは待って欲しいのです……」
「なっ……」
——なんだよそれ！
ナイアルは焦る。それは困る。こういう記事というのは速報性が命なのだ。街道を行き来する有名な盗賊団が逮捕された、なんてことはいつまでも隠せるものではない。
「な、なんでだよ⁉」
「記事から、こちらの警備体制を予想されては困るのです。もう少しの間でよいですから新聞に掲載するのは待ってください」
「そんなこと言ってたら、ニュースにならねえよ！」
言い返しつつも旗色は悪い。市民のためと言われては断りにくい。
「せっかく熱心に撮っていただいたのに、申し訳ありません」
メイベル市長がドロシーに向かってもきちんと頭を下げた。
「あ……そうですね。いえいえ。なるほど」
「おい」



なるほどじゃねえよ。思わず突っ込む。ちったあ写真が使えなくなって残念がりやがれってのー！

「でも、市長さんも少しの間だけって言ってますし」

「俺の記者魂が憤ってるんだよ！」

「先輩が勝てないことは判ってましたし」

「おいこら」

——市長に笑われてるじゃねえか。

まったく、とナイアルは思う。ニマニマとさっきからしまりのねえ顔をしやがって。眼鏡の奥のほんにゃりとした瞳を見つめながらナイアルはため息をついた。

——って、おい。何をしてやがる。

「はい。ピース！　笑って笑って——そうそう、いい顔ですよぅ。とっても美人さんです！」

「『はい、チーズ』じゃねえのかよ！　てか、なんで俺と市長なんて撮ってるんだよ！　あと、男に美人もくそもあるか。いらねーっ」

「チーズ、だとお腹が空いちゃうんですよぅ」

「どんだけ食いしんぼなんだ、おまえは」

「いやー、ほら撮ってるときって、何も食べられないじゃないですか。だから、油断すると、ついお腹が減ってですねえ」

「聞いてねぇよ……。てか、普通にしとけ、普通に！」
メイベル市長が、ではお願いしますねと言って去っていった。その後ろに影のようにメイドのリラが付いていく。
まあ――とりあえず事件のほうは解決したっぽい。疲労感がたっぷりと押し寄せてきた。
ナイアルの懐事情だけが未解決のままだった。

エピローグ

ふかふかの絨毯は足の裏で踏みつけるたびに、頼りない感触を返してくる。靴の半分ほどまで沈み込むものだから落ち着かないったら。
ドロシーはボース市最大のレストランの中を歩きつつ、ひたすら目に入るものを値踏みしていた。
あの額に入った絵は、いったいリラをいくら積めば手に入るんだろう。確か昨年の王都で開かれた展覧会で話題になった作品だと思うのだけど……。こうしてみると市長の屋敷は決して華美ではなかったのだなぁとわかる。
視線を巡らせると、フロアの片隅のテーブルに座る先輩の姿が目に入った。
近づいて、向かいの席に腰を下ろす。

「せ、先輩。ミラはだいじょうぶなんですか。ココ、高そうですよぅ」
にっと先輩記者が笑みを浮かべた。
「穴埋めに書いたやつで経費が出た」
と言った。
詳しく聞いてみると、《風の狼》に関する記事は載せられなかったものの、穴埋めにと出した『メイベル市長の華麗な一日』が採用され、取材費が出たという。
「おまえの写真は使えなかったが……悪かったな。苦労だけかけちまって」
「いえいえー」
「詫びといっちゃなんだが、好きなもん頼んでいいぞ――って、なんだよ、意外極まりないって顔をしやがって！」
「いえいえ、この顔は地顔ですし」
「嘘つけ」
「決してナイアル先輩にしては珍しいこともあるなんて、かけらも考えてないですよ」
「そんなこと考えてやがったか」
「えへへへ……ちょっとだけですよぅ」
「食ったら、次の街に行くからなっ」
「はーい」

ドロシーは笑顔で応えた。
好きなものを頼んでいい――なんて魅惑的な言葉だろう。
嬉しくてにやけてしまう。
「次は――」
「はい？」
ナイアル先輩が顔を背け、明後日のほうを見つめつつ口を開く。
「スクープ写真を載っけるぞ」
ぼそっと、そんなことを言った。
ドロシーだって気づいた。ドロシーがちょっとしたスランプから抜け出せたのかどうか、先輩は気にかけてくれているのだ。
ちらりと、椅子の背にかけた自分の鞄を見やる。その中には、感光クオーツから焼きつけたばかりの、マーケットの大捕り物の写真が入っている。
夢中になって撮った写真の数々は自分でも納得のできるものだった。
いつの間にか――いつも通りに撮れていた。
きっと、あれこれ考える余裕がなかったのも良かったのだ。
「だから……撮れねえとかゆーなよ！」
言い放ってから、もう顔を上げずに並べられた食事を食べ始めた。

「はい！」
元気よく、そう答えることができた。
鞄の中の写真たち。とりわけ最後に撮った一枚はお気に入り。会心の出来栄えだ。
ナイアル先輩と、ボース市長メイベルのツーショット。
滅多に見せない照れたような顔のナイアルと、柔らかく微笑むメイベル。
ふたりの内面まで写せているように思う。
でも、その一枚はこの先輩には見せられない。自分が名士と写りこんでいる写真など、ナイアル・バーンズという男はきっと有難いなんて思わない。
仕方ない。個人用で保管しておくしかない。もったいないけど。
運ばれてきた平目のムニエルを口に運びながらドロシーは少し残念に思った。
それでも、とドロシー・ハイアットは思う。
自分にとっては、会心の写真が撮れたというそのこと自体が、他の何よりも誇らしくあり嬉しいのだった。

■第2話　うたかたの夢を見ないで



1

船の甲板の縁ぎりぎりにひとりの娘が立っている。

強い風にブラウンの髪が躍っていた。黄色のリボンは今にも千切れてしまいそう。

背中から押しつけてくる風に髪が乱れて口許を隠した。

「うっ……ぷ！　ぺぺぺぺ！　あうう。口の中に髪が入っ、んぺぺっ。自分の髪なんて、食べても美味しくないですよぅ。いえ、決して他人の髪なら美味しいというわけではないのですがっ！」

と、彼女はひとりでボケてひとりで突っ込む。おっとりした性格をそのまま現したかのような、鼻の上にちょこんと乗った丸眼鏡がトレードマーク。リベール通信社のまだまだ新米カメラマン、ドロシー・ハイアットだった。

ドロシーは吹きつける風に身体を揺らしながら、船縁に掴まって、ぐっと身体を乗り出した。

眼下を覗き込む。

見えるのは海――ではない。

遥か下には茶色の大地を割って流れる青い川。

ドロシーが立っているのは空を飛ぶ船の甲板だった。

定期便が再開し、リベール王国の上空には飛行船が飛ぶようになっている。

目をこらす。

船の影が落ちる大地から視線を動かし、下流に向かって徐々に広がってゆく川の流れを追う。

「あっ！」

見えた。

海に向かって扇のように広がってゆく河口と、その中州の上に作られた白い街並み。

そう叫んだときにはもうドロシーはカメラを構えてシャッターを切っていた。

「あれが……ルーアンですか！」

吹きつける風にドロシーの髪がふたたび躍る。躍る。

だが、くしゃくしゃになってしまった髪を気にすることもなく、彼女はファインダーから目を離さない。

「きれいな子ですよぅ。コントラストが素敵です！」

口許からは言葉が絶えない。

子、と言っているが、その言葉が指しているのは青い海に浮かぶかのように造られた白い街のことだ。

海港都市ルーアン。

別名、水の上の都。

いった。
小刻みに機械音が鳴り響き、ファインダー越しの光景を感光クオーツへと次々に焼きつけて
「街並みの白は、あれは煉瓦ですね！　海の青との対比が素晴らしいですねっ。そりゃもう美人さんです！　グッドです！　ビューティホーです！」
夢中になっているドロシーに背後から近づく影があった。
「お嬢さん、そろそろ船内にお戻りください。着陸に入りますから」
「ふぁ？」
声を掛けられてようやく集中が切れたドロシーが、それでもまだ夢見るような表情で振り返った。
「あの……。ご職業に熱心なところ恐れ入りますが。到着の瞬間は揺れますし、船内にいたほうが安全ですので」
振り返ったドロシーの前に、空飛ぶ船の船員が白い帽子を取って笑いかけてきた。
「あ……。ああ！　りょ、了解です！　ばっちりわかりました、はい」
そういえば到着を知らせるアナウンスが聞こえたような。
――こんなことがナイアル先輩に知られたら、また呆れられてしまいますねー。
ドロシーは名残り惜しそうに振り返りつつ、船員の案内に従って船の中に戻った。
それから半刻後。

2

船はルーアンへと到着し、ドロシー・ハイアットは本社からの手紙を携え、同僚であるナイアルの滞在するホテルを目指していた。

空港から出て西へ、ドロシーはまっすぐに白い石畳の通りを歩く。
海から吹く風に混じった潮の香りが鼻をくすぐっている
初めて訪れる街。目に映る景色は全てが新鮮。残らずカメラに収めたいところだ。
――でも今はお仕事が先です。
ナイアル先輩は、この通りを行った先の《ブランシュ》という名のホテルに泊まっているらしい。急げ急げ。
――っとと、いけない。
前の街では、こうやって急ぎすぎてドロシーはあやうくコケそうになったのだ。
早々何度も同じ失敗はしでかさない。たとえこの白亜の街並みが王国一の優美さを誇っているんじゃないかって思えて、目を奪われてしまお――おや、あれは何でしょう？
左手に大きな糸巻が見えた。
「ぶっとい鉄の糸を巻きつけてありますね……はて？」

一般的にはそれを『鎖』と呼ぶ。家一軒ほどもある円筒に、大人の腕ほどもありそうな鉄の鎖がぐるぐると巻きつけてあるのだ。そんな大きな筒が三階ほどの高さのところに横倒しになって見えている。

近づいてみれば、馬車がすれ違えそうなほどの大きな橋のつけ根だった。左右に太い石の塔が立っていて、その塔に両端を支えられる形で倒した円筒が据えつけられている。ぱっと見、まるで橋の袂に作られた門のようだ。

ああ、とドロシーはようやくその仕掛けの正体に思い至った。

——ひょっとしてこれは吊り橋の巻き上げ機なのでは？

その証拠に、橋の中央あたりには切れ目が見えるし、川を渡った向こう側にも同じような横倒しの円筒が見えている。

「ふあ～～～～。すっごい大きさですよぅ！」

ドロシーは橋の大きさに素直に感動してしまった。

橋は幅広なだけでなく、歩けば百アージュ、つまり二百歩ほどもありそうな長さも持っている。

しかも、これは『跳ね橋』だ。大きな筒を回して鉄の鎖を絡め取り、橋を中央で割って手前と向こうに引き上げるのだ。この大きな橋の半分を持ち上げることができるなんて、巻き上げ装置はきっと《導力機関》を使っているに違いない。

これはすごい！　必見ものの大仕掛けだ！

——よし、先輩には待っていてもらいましょう。

胸元に提げた紐を手繰り、オーバルカメラを手にしようとしたときだ。

背後からどん、と押されてドロシーはたたらを踏んだ。

「あ、あ、あ！」

手の中でお手玉するカメラを落とすまいと必死になる。そこにさらに、どん、どんと二度押されて、ドロシーは堪らず膝をついた。石畳に打ちつけて思わず悲鳴があがる。

じん、と膝頭に痛みが走った。涙目になる。なんとかカメラは落とさなかった。

「痛いですよぉ！」

誰かにぶつかられたのだ。それはわかっていた。顔を上げて、自分を追い越した輩を見る。

五歩ほど先で男が三人、振り返っていた。

どうやら橋を渡って南のほうへと行こうとしていたようだ。

「んだよ？」

「ああん！」

「誰だおまえ？」

振り返った顔は思ったよりも若かった。まだ大人とは言えない、というあたりの年頃の三人だ。それでもドロシーよりは年上だろうか。

「誰って……いいましてもですねー。通りすがりのカメラマンですけどぉ」
「はあ？」
「なんだ、観光客かよ」
「見物がしたいんだったら、俺たちが案内してやろうか？」
灰色の髪の男がそう言い、深い緑にも見える髪の男がすかさず突っ込んだ。
「ロッコ。おまえ、この前もその台詞言ったよな」
「言うんじゃねえよ、ディン！　思い出したくねえんだ！」
柄の悪いことこの上ない口調でそんなことを言う。
——これは……不良さんってやつですねー。
「それにこんな眼鏡のちんちくりんをナンパしてもしょーがねー！　さっさといつもの場所に行くぜ！」
さすがのドロシーもむっとくるところ。だが、それよりも大事な事実が発覚した。
「って、あれあれ？」
気づいて焦る。
「ポーチがない!?　どど、どこへ落としたのでしょう！」
ベルトに留め金で引っ掛けていたポーチがない。中に社で預かった封筒が入っているというのに。転んだときに落としたのだろうか。

三人組のことなど頭から飛んでしまって、あわてて屈んで探そうとした。
「これか？」
ひょいと自分の顔の前に見覚えのあるポーチが差し出される。
「あ、これこれ。これですよー」
ありがとうございます、と顔をあげたら、そこにいたはずの人物は、もう駆け出していた。
背中が先ほどの三人に向かってゆく。
「遅えぞ、カイヤ！」
「は、はい！　今行きますっ、センパイ！」
三人組よりもやや若い。カイヤと呼ばれた彼はまだ少年の面影を残していた。潮風にやかれた黒い髪と、袖のない服を着て、肩まで日焼けした男の子だった。
なんだか、三人組に比べると違和感がある。
センパイ……？
——不良さんの先輩・後輩ってことでしょうか？
大きな橋を渡って南へと駆けていく四人を見つめていたドロシーだったが、はっと気づいて、首から紐で提げていたカメラを構えた。
パチリ、と。
四人の背中を咄嗟に映しておいたのは職業意識のなせる業だったけれど、それが後々役立つ

ことになろうとは。
ドロシー自身もこのときには思ってもいないことだった。
夕暮れを告げる鐘が鳴る。ドロシーはホテルを目指して歩きだした。

3

「んぁ？　なんてった？」
ナイアルが顔を上げると、目の端に映った少年――ヨシュアが肩をすくめる。
「いえ、お仕事中にお邪魔してすみません」
「あー。いいんだいいんだ。けど、ちょっと待ってくれ」
手早く机の上のメモ書きを片づけてから椅子ごと向き直る。
ホテル《ブランシュ》の一室。地下にある大部屋である。
ナイアルは休暇でここに滞在しているのだが、それでも仕事は付いてまわる。
――まあ、完全に休暇ってわけじゃねえしな。
「なんの記事を書いてたの？」
少年の背後に立っていた少女――エステルが言った。
「ああ、この前の空賊騒ぎのまとめだ」
「えっ。あのボースの飛行船乗っ取り事件の？　あれ、もうリベール通信で記事になってたでしょ？」
「あのなっ。ニュースってのはな、スクープを一回載せりゃ終わりってもんじゃねーの！」
「そんなもん？」
「そんなもん！」
むしろ、しっかりした記事なんてもんは、充分な取材と検証の末に書かれるものだから、第一報を載せてからが勝負だったりもするのだ。
「へー」
「なんだよ？」
「意外と真面目に記者してたんだ、って思って」
「あのなっ！」
「冗談、冗談！」
あははと笑う少女に、ナイアルは渋い顔をしてみせた。この準遊撃士に悪気がないことは判っているが、それでも多少は大人の威厳ってものを見せねえと。
苦虫を噛んでみせてから、ナイアルは先ほど片耳で聞いていたヨシュアの言葉を思い出す。
ええと、確かこいつら……。

「これからエア＝レッテンまで行くってのか？」
「ええ、そういう事になりそうです」
「公爵様のお迎えってやつ？」
エステルがヨシュアの言葉に付け足した――公爵？
「ああ、あの……なんだっけ？　でゅらん、とか、でろんとか」
「ぜんぜん違いますよ。というか、わざと間違えてますよね、ナイアルさん」
――ばれたか。
仮にも記者だ。いちど覚えた名前は忘れないからな。
「でも、そっちのほうがお似合いよね。でろん公爵。うん、ぴったり！」
「エステル……君もそういう……一応仮にもあれでもなんとか王族らしいんだよ？」
「おまえらふたりのほうが容赦ねえじゃねえか……」
呆れてしまう。怖いもの知らずのコンビだった。
その一応仮にも王族なデュナン公爵は、お忍びでルーアンの街に滞在していた。それが、ヨシュアたちの話によれば、エア・レッテンの関所を気に入ってしまい、籠ったまま帰ってこないらしい。
つき添いの執事が困って、公爵をどうにかしてルーアンの街に連れ戻してくれと泣きついてきた。問題ばかり起こすことで知られる公爵だが、今回も負けず劣らず我侭し放題ってことのようだ。
「そういうわけで、僕たちしばらくルーアンを離れますから」
「わざわざ伝えに来てくれたってわけか。いつ出るんだ？」
「今からよ」とエステル。
「急だな、おい！　もう、夜になるぞ」
「ほら、善は急げっていうし！」
「善か……？」
むしろあの公爵には構わないほうが世の中のためって気もするが。
それでも根は真面目な遊撃士コンビだ。別れの挨拶もそこそこに、ふたりはナイアルの部屋を辞した。
扉がばたんとしまり、地下の部屋に静けさが戻る。嵐が去っていった。
明かりが薄暗くなった印象を持った。
あの、はきはきよくしゃべる少女がいなくなるといつもは気にならない寂しさが際立ってしまう。弟だというヨシュアが彼女を大切にしているのも判るような気がするナイアルだ。
――って、柄でもねえな、俺としたことが。
まあ、静かなのはありがたい。取材のメモをもう少しまとめ――。
バン！

「センパーーーーイ！」
　――るヒマはないらしい。
「先輩！先輩！先輩！　ナイアル先輩！　お久しぶりですぅ！」
「やかましい！」
　扉をぶち開けて転がりこんできたヤツを怒鳴りつけた。
「おやおや？　何かご機嫌ななめですよぅ」
「うるさいんだよ、おまえは！　ホテルなんだから、ちったあ、静かにしろっ！　って、ドロシーじゃねえか……」
「あ、はい。ドロシーですよぅ。お久しぶりです、ナイアル先輩！　あの、あの、今そこでエステルちゃんとヨシュアくんとすれ違いましたよ！」
「ああ、さっきまでこの部屋にいたからな」
「はや？　あのぉ、いっしょに泊っていらしたんですか？」
「一晩だけな。部屋を追い出されたっていうんで、ここに泊めたんだよ。街をちょっと離れるって、律儀にわざわざ伝えに来てくれたってわけだ」
「なるほど」
「で、おまえは何でここにいるんだよ」
「先輩が次の街に行こうって言ったんじゃないですか」

「あれは建前だ」
　あっさりそう言ったら、がっくりと肩を落とされた。まあ、出鼻はくじいておかないとな。
　新米カメラマンだったドロシーのお守りはボースでの取材が終わった今、解消されたはずだった。やっとこのトンチキ娘としばし離れられたと思ったのだが……。
「いま、何かひどいことを考えませんでしたか、先輩？」
「まさか」
「そーですかぁ？」
　上目使いでじとっとナイアルのほうを見上げてくる。
「だから、どうしてこんなところにいるんだよ？」
　王都の本社に戻っていたはずなのに。
「あ、そーでした。ころっと忘れてました」
　――あのな。
「実はですね……」
　話しだそうとしたドロシーのお腹がくーっと音を立てて鳴った。
　まるでその音に応えるように、ぐうとナイアルの腹も鳴る。
　地下の部屋は窓がない。導力灯の明かりは昼間からずっと点いたままで、時間を示すものと言えば、先ほど聞こえたような時を告げる鐘の音だけ。

しかし、この腹具合からすると、そろそろ……。
「とりあえずメシにするか？」
「はい！」
こういうときだけは、どこかの少女に負けないくらいの笑みを浮かべるのだから、女ってやつは始末に負えないとナイアルは思う。
話は後回しにしてふたりして夕食を取ることになった。

4

ナイアルたちが食事処として選んだのは、ホテル《ブランシュ》の近くにあるカジノバー《ラヴァンタル》だ。
二階がカジノという造りなのに静かな食事処で、天井でゆっくりと回る飾り羽車の音さえ聞こえそうなほど。そろそろ夕食時だというのに客の数も少なかった。
「これでやっていけるのでしょうか」
ドロシーが聞くので、ナイアルは答えてやった。
「客が少ないのは二階が改装中だからなんだよ」
そう聞いている。

「あ。つぶれかけているわけじゃなかったんですねぇ！」
「しぃーっ！」
なぜにカウンターに聞こえそうなテーブルでそれを言うかな、こいつは。
頼んだのは、魚のムニエルとアゼリア・ロゼ。この店では定番だという二品だった。
魚はサモーナで、どうやら海で獲れたばかりのよう。新鮮だった。衣がぱりっとしていて、ひと口大に切って口の中に放り込むと、噛んだ瞬間に脂とうまみが口の中に広がった。身も肉厚で香草の香りも効いている。
アゼリア・ロゼのほうは木の実のジュースで作ったカクテルだ。甘い飲み口だけれどしっかりお酒だから飲み易いからと油断すると酔う。
ピンク色の液体を口につけていたドロシーが、ほんにゃりとした顔になった。頬のほうも、ややピンク色になっていた。
「美味しいですねー」
「呑み過ぎるなよ？　いいな？」
「はいー」
「信用できねえ」
「そんなことないですよー。ぜんっぜん、酔ってないですよー。あははは。なんだか気分がよくなってきちゃいましたですよぅ」

——だめだこりゃ。

「で、話の続きだけどな。あのふたり、一度はホテルの最上階に宿を取ったはずだったんだが、デュナン公爵ってのに追い出されたってぇわけだ」

「ほへー」

ふたりというのはエステルとヨシュアのことだ。

あの姉弟の遊撃士コンビは、この街を訪れた日にホテルの最上階のスイートを取ることができた。たまたまキャンセルが出たその部屋を、遊撃士ならば普通客室料金でいいとホテル側が勧めてくれたのだ。

だが、そこにデュナン公爵が登場する。

リベール王国女王の甥にあたるという、デュナン・フォン・アウスレーゼ公爵殿は、海が眺められる部屋をお希みだとかで、お忍び旅行中の宿として強引に最上階スイートを横取りしたのだ。

宿を失ったエステルとヨシュアだったが、ちょうどその場にナイアルが居合わせた。

自分が取った部屋にはベッドも余っていたし、知らない仲でもない。

「で、ふぇんぱいが、部屋をていきょーしたんれふね」

「まあな」

ムニエルの最後の欠片を口に運びながらナイアルは言った。

それでナイアルのほうの近況報告は終わった。

「じゃ、そっちの番だ」

「そっち？　ぱん？　んー。ぱんぱん、ぱぱぱん、っと。あはははは」

ぽやんとした顔でそんなことを言って笑いだしやがった。

「頭から水かぶせっぞ！　だからなんの用でルーアンまで来たのかってことだよ！」

「ああ！」

——うあ、イライラする！　天然が酔うとうぜぇ。思考のクロックが三分の一くらいになってるんじゃねーか、こいつー！

「そうだったのでした！　ええと、先輩に極秘指令が下ったですよぅ」

「はっ？」

極秘指令？

「んっと、このポーチ……、あ、先輩、そういえば、このポーチですけど、さっき落として無くしそうになったときに、親切な後輩不良さんに拾ってもらってですねぇ——」

「その話は後で聞く。先に本社からのってやつだ！」

「せっかちさんですー。あ、ほら、これですよ」

ポーチから取り出したのは一通の封筒だった。本社の定型業務用封筒だ。白色のそっけないやつ。受け取って開いて読む。

「極秘でもなんでもないだろこれ。なになに……『ルーアン地方をお忍びで王族がひとり、旅行している。続報のための記事を送れ』？」
「わたしはカメラマンしてこいって言われましたー。ぱっと行って、ぱっと帰ってこいって」
「飛行船代がもったいねえよ。ん？　……お忍びで旅行の王族？　続報？」
「あー。わたし、今思い出しました！　どこかで聞いた名前だと思ったんです。リベール通信の4号ですね！　でろりーこーしゃく」
「溶けてるだろ、それ」
　デュナン公爵のことか。そういえば自分が公爵のことを知っていたのも、リベール通信の4号に記事が載っていたからだ。ルーアン地方のどこかを旅行中と書いてあった。
　どこかどころか、このルーアンの街にまさにいたわけだが。
　——まーた、ゴシップ記事かよ。
　だが、とナイアルは考える。これは好都合かもしれない。キノコみたいな頭に髭を生やした左右の眉毛がもう少しで繋がりそうなヘンなおじさん（エステル談）だが、同じホテルに滞在中なら、二、三枚の記事ならあっという間に……。
「ああ！」
　思わずあげた大声に、目の前で船を漕ぎそうになっていたドロシーがびくっと身体をすくめて驚いた。

「なな、なんですか、ふぇんぱい」
「今いねえよ、そいつ！」
　エステルとヨシュアがエア＝レッテンまで迎えに行ったばかりじゃないか……。
　厄介なヤツほど決まって、より厄介なことを引き起こしてくれるものらしかった。
　目の前であっという間につっぷして寝息を立てだした同僚のカメラマンを見ながらナイアルは思った。
　——俺の周りって、こんなのばっかりかよ……。
　どうやら、今度の記事も簡単にはものにできそうもない。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

**アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！**



3名様

「も～っと集まれ！ファルコム学園」缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.151プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3：アンケート①「イースX」発売を前に準備していることは？
アンケート②「東京ゲームショウ2023」に行く予定はありますか？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イースX -NORDICS (ノーディクス)- 最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：ファルコムニュース
4：暁の軌跡最新情報
5：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

応募締め切り　9月27日(水)

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊FALCOM MAGAZINE Vol. 151

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/